

題目 競争状況における最大追求者の非適応性 ―カード選択課題による実験的検討―

氏名 諸橋寧々

指導教員 結城雅樹

私たちの日常的における選択的意思決定は満足者 (Satisficer) と最大追求者 (Maximizer) に分けられ、後者ほど満足度が低いことが知られている。だが、先行研究で最大追求者の不満足の原因は後悔という心理的要因での説明にとどまる。本研究は、私たちの意思決定はしばしば「自分が取らなければ他人に取られるかもしれない」という競争性のある状況下で行われる点に着目した。このような競争状況での最大追求行動は、獲得機会があった選択肢を取り逃がし、客観的に不利な帰結を被るために、不満足を感じるという仮説を、1)シミュレーション、2)大学生を対象とした質問紙調査とゲーム実験、3)成人を対象とした質問紙調査、という3つの方法で検討した。研究1では、競争的カード選択課題を設定しシミュレーションを行った。エージェントたちは、金額が不明な10枚のカードの中から1枚を繰り返し選択して金額を確認し、満足できる金額のカードを獲得することを目指した。選択肢に対する他者との競争性を操作して課題を行った結果、競争性が高い状況ほど、金額の高いカードを求める最大追求的なエージェントが、高いカードを取り逃がしたことが示された。研究2では、大学生87名を対象に、最大追求傾向と取り逃がし経験を測定する尺度を用いた質問紙調査と、競争的カード選択課題を行った。その結果、質問紙調査では、最大追求者ほど取り逃がしを経験していた。実験では、より探索を行った参加者ほど獲得金額が低く、探索傾向と獲得カードに対する満足度の関連を、獲得金額が媒介していた。研究3では、日米の成人を対象に研究2と同様の調査を行い、最大追求傾向と取り逃がし経験の汎文化的再現性を検討した。その結果、最大追求傾向の汎文化的再現性は見られなかった。取り逃がし経験は、アメリカ人では最大追求傾向と正の関連が見られたが、日本人では意思決定困難のみと関連が見られた。これらの結果から、競争状況では最大追求者が取り逃がしによって不利な帰結を被るという仮説はおおむね支持された。しかし最大追求傾向尺度の信頼性や結果は安定せず、最大追求傾向の概念的妥当性には疑問が残った。本研究の成果は、最大追求者に関する従来の研究が見落としてきた「選択行動の社会性」に注目し、それを理論の中心に据えたことで、最大追求傾向が非適応的になる原因を新たな視点から説明した点にある。